

## スピノザ解釈史における「属性」論争

松田克進

(受付 2005年5月10日)

### 序

スピノザ形而上学の解釈史における最大の問題の一つは、「属性」概念をどのように捉えるかという問題である。この問題を巡って、いわゆる「属性」論争が展開された。論争は次のような2つの解釈の間で戦われた。一方は、観念論的解釈（「主観的解釈」とも呼ばれる）、他方は、实在論的解釈（「客観的解釈」とも呼ばれる）である。観念論的解釈とは、＜属性とは、知性が実体を知覚するさいの主観的形式である＞という解釈である。实在論的解釈とは、＜属性とは、実体が有する客観的性質である＞という解釈である。

論争のピークは、新旧2回あった。旧い方のピークは、19世紀における、エルトマン（およびシュヴェーグラー）の観念論的解釈とフィッシャーの实在論的解釈との対立である。新しい方のピークは、20世紀における、ウルフソンの観念論的解釈とゲルーの实在論的解釈の対立である。

論争の決着はどうなったか。今日では、一般的に、フィッシャーやゲルーの实在論的解釈に軍配が上がっているという印象がある。しかし、事はそれほど単純ではない。「属性」概念をどの角度から解釈するかによって評価は変化する。ある角度において实在論的解釈のほうが正しいが、別の角度においては観念論的解釈が正しいのである。このようなバランスのよい解釈は、昨今のメジャーなスピノザ研究においては見られない（少なくとも私の知る限りで）。研究動向に関する以上のような自覚の下で、私は、スピノザ解釈史における「属性」論争に対して部分勝訴・部分敗訴の判定を下したい。そして、そのような判定の基本線を描くというのが本研究ノートの目論見である。

以下のような順序で論述を進める。第1章では、スピノザ形而上学における「属性」を私がどのように解釈するかを端的に述べる。筆者の私見を明確化することで、過去の研究に対する筆者の批判的眼差しのスタンスが明示されるはずである。

第2章では、論争の第1のピーク、すなわちエルトマン（およびシュヴェーグラー）とフィッシャーの対立を取り上げる。

第3章では、論争の第2のピーク、すなわちウルフソンとゲルーの対立を取り上げる。

第4章では、第2章と第3章において概観された「属性」論争に対して、観念論的解釈と実在論的解釈のそれぞれに部分勝訴・部分敗訴の判定を下す。

## 第1章 スピノザにおける「属性」とは

私はすでに、松田(2005)において、スピノザ形而上学における「属性」についての私の解釈を提示した。そのエッセンスを本章で提示する。

属性とは、諸様態から成る集合であり、任意の様態は少なくとも一つの属性に属する。

ここで3つの疑問が浮ぶ。第1に、属性という集合はいかなる条件を充たす集合であるか。第2に、属性と実体との関係はどのようなものか。第3に、複数の属性に同時に属する様態は存在するのか(言い換えれば、空でない共通部分を持つ複数の属性が存在するのか、更に言い換えれば、様態と様態の貫属性的な数的同一性は成り立ち得るか)。

### 延長属性内の因果的結合

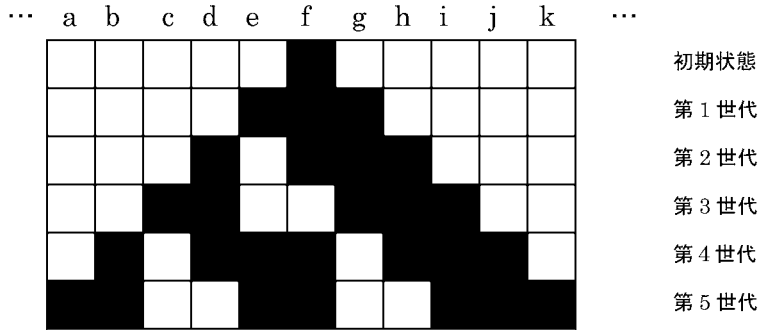
第1の疑問を取り上げる。

ある属性の内部には、スピノザが「秩序と連結 (*ordo, et connexio*)」とよぶ因果的秩序が存在する。今、延長属性(延長様態すなわち物体から成る属性)内部における因果的秩序の一次近似モデルとして、イギリス人数学者スティーヴン・ウルフラム(Stephen Wolfram)が着想した1次元セル・オートマトンを取り上げる。このモデルは、スピノザ形而上学にとって極めて特徴的な次の2条件を明確に満足している。すなわち、<任意の物体はその周囲の物体と交互作用し得る>という条件、および、<物体同士の作用は一義的に決定される>という条件である。

セル(柵目)が横一列につながったリボンを考え、各セルは黒か白かの状態にあるとする。黒と白は、差し当たりそれぞれ<運動>と<静止>と考えておくことにしよう。このリボンの下に同形のリボンを配置していく。この操作は離散時系列で行われるので、最初のリボンを初期状態、次のリボンを第1世代、次を第2世代、以下第3世代、第4世代などと呼ぶことにする。ここで、一つの世代から次の世代への変化を局所的に定める規則を導入する。すなわち、あるセルの状態はそれ自身および左右のセル、合わせて3つのセル(これをそのセルの「近傍」と呼ぼう)の状態決定されるとする。近傍の黒・白の配列は全部で8種類あるので、規則の定め方は2の8乗、すなわち256通り考えられ得る。今仮に規則を次のように決める<sup>1)</sup>(上段3個のセルが真ん中のセルの近傍の条件を、下のセルが結果の状態を表す)。



そうすると、例えば次のような1次元セル・オートマトンの絵模様ができ上がる。



### 思惟属性内の因果的結合

私は、観念相互の因果的連結のモデルとして、上図（これを「延長セル・オートマトン」と呼ぶことにする）と同様のセル・オートマトン（「思惟セル・オートマトン」と呼ぶことにする）を構成する。次の3点に注意せねばならない。

第1に、延長セルオートマトンでは各セルの可能な状態としては運動と静止を取り上げ、それぞれを■と□で表現したが、同じことを思惟セル・オートマトンに当てはめるわけにはいかない。そこで、■を**b**、□を**w**という記号に置き換える。これら**b**と**w**は観念にとって可能な2種類の内容を表していることにする。

第2に、延長セル・オートマトンと思惟セル・オートマトンの初期状態の間に同型性は成り立つだろうか。スピノザは実はこの点については明示的な議論をしていない（というのもスピノザには初期条件という概念がなく、因果関係は「永遠から永遠に」続くと考えられているので当然である）が、第1部公理6「真の観念はその対象と一致しなければならない」に依拠しつつ、それらは同型的であると仮定することにしよう。そうすると、□□□□□■□□□□□□という初期条件に対応する思惟セル・オートマトンの初期条件は、wwwwwbwwwwwとなる。

第3の、そして最も重要な検討点は、近傍から何が結果するかを規定する因果規則がどのように規定されるのかということである。既述のように、3つのセルからなる近傍から1つの結果を導く規則は2の8乗、つまり256通り考えられる。思惟セル・オートマトンの因果

1) ウルフラムのセル・オートマトンは、複雑系についての初等的な解説書においてしばしば紹介されているが、本論で例示するセル・オートマトンの例は吉永良正著『「複雑系」とは何か』（講談社、1996）に掲げられているものである。

規則（推論規則）としてこの256通りの中のどの一つが選ばれることになるのだろうか。まさにこの問題に答えようとするのが、第1部公理4「結果の認識は原因の認識に依存しかつこれを含む」である。例えば、■□□から■を導く因果規則の場合、■□□が原因で■が結果になっている。このとき、「結果の認識」とは■に対応する観念、すなわち **b** のことであり、他方、「原因の認識」とは■□□に対応する観念、すなわち **bww** のことである。この公理によると、この場合、**b** が **bww** に「依存しかつこれを含む」。つまり **b** は **bww** に因果的に依存しており、**b** と **w** と **w** とを自らの近傍の内に含むのである。したがって、**bww** を近傍とする場合の結果（帰結）は **b** でなければならない。かくして、次のような計8つの因果規則が決定されることになる。

**w w w   b w w   w b w   w w b   b b w   b w b   w b b   b b b**  
**w        b        b        b        b        b        w        b**

そしてこれらの規則に従った思惟セル・オートマトンは次のような絵模様を描くことになる。

…  $\alpha \beta \gamma \delta \varepsilon \zeta \varphi \theta \iota \kappa \lambda$  …  
**w w w w w b w w w w w** 初期条件  
**w w w w b b b w w w w** 第1世代  
**w w w b w b b b w w w** 第2世代  
**w w b b w w b b b w w** 第3世代  
**w b w b b b w b b b w** 第4世代  
**b b w w b b w w b b b** 第5世代

このように、公理4（と公理6）を認める限り、言い換えれば、因果規則の同型性（と初期条件の同型性）を認める限り、必然的に、延長セル・オートマトンと思惟セル・オートマトンは同型的になる。また、延長や思惟以外の属性についても同様のモデルを同様の仕方でも構成するならば、その新しいモデルも、既成のモデルと必然的に同型になる。

### 属性内の秩序としての実体

第2の疑問（属性と実体との関係はどのようなものか）に移る。スピノザがある属性における実体と捉えていたものは、その属性における秩序ないし因果的連結のことである。セル・オートマトンのモデルを用いれば、ある属性における実体とは、セル・オートマトンの絵模様に対応する。ここで「絵模様」と言うのは、□や■、**w** と **b**、といった図柄の種類を抽象した——その意味で<純粹>な——セルの並び方のことである。

そうすると、実体の数的同一性はどのように定義されるのであろうか。すなわち、今、属性  $X$  における実体を  $\text{Sub}(X)$  と表記するとすれば、 $\text{Sub}(A) = \text{Sub}(B)$  はどのように定義され得るのであろうか。今見たとおり、属性  $X$  における実体とは、 $X$  における秩序（因果的連結）に他ならないのであれば、 $\text{Sub}(A) = \text{Sub}(B)$  は、属性  $A$  と  $B$  それぞれの秩序（因果的結合）の同一性として定義され得ることになる。セル・オートマトンの同型性が、そのまま、実体の数的同一性の条件として横滑りすることになるのである。

なお、スピノザ形而上学の根本テーゼとして唯一実体説（神のみが実体であるという説）が取り上げられ、その意味内容については解釈者によって様々な議論がなされてきたが、このテーゼは、次のように非常に単純にその内実を説明できる。すなわちスピノザは、無限に多くの属性が存在すると考える一方で、各々の属性内における因果連結を示すセル・オートマトンは全て同型的であると考えていたのである（このことは論証の対象であると言うより、自然の統一性に関する彼の公理であると思なすべきであろう）。したがって、今、属性を、 $A$ ,  $B$ ,  $C$ , ……と表記するならば、

$$\text{Sub}(A) = \text{Sub}(B) = \text{Sub}(C) = \dots\dots$$

となる。つまり、これら諸属性における実体は全て数的に同一である。そしてこの同一実体をスピノザは「神」と名付けているのである。もちろん神ないし実体の存在証明については論ずべきことは少なくないが、いざれにせよ唯一実体説というテーゼの意味内容は、これ以上のことでも以下のことでもない。スピノザにとって実体の唯一性とは属性の秩序の唯一性に他ならないのである。

### 様態の貫属性的同一性

第3の疑問（様態の貫属性的な数的同一性の問題）に移る。ここでは特に延長様態とそれに対応する思惟様態との間に数的同一性が成り立つのか否か、という観点から検討する。

スピノザのコーパスには、延長様態とそれに対応する思惟様態との数的同一性に関して、それを肯定するテキストと否定するテキストとが混在している。この事態をどのように整合的に理解することができるだろうか。

$A$  と  $B$  という二つの表現者の〈意味〉が同一であると同時に異なるという状況は、哲学史においては実は馴染み深いものである。すなわち現代意味論において、例えば「宵の明星」と「明の明星」は、指示対象においては同じであるが、意義においては異なる、ということは常識に属する。意義と指示対象との相違に類比的な相違が、スピノザ形而上学における様態の貫属性的同一性を解釈する上でも重要であるというのが私の見解である。すなわち、延長様態（物体） $a$  と思惟様態（観念） $\alpha$  とでは、指示対象は同一であるが、意義（＝指示対

象の与えられ方)は異なるのである。

延長属性における実体とは、延長セル・オートマトンにおける□と■の並び方(絵模様)全体である。延長様態とは、そのような□と■の絵模様全体における特定の列における□と■の並び方(絵模様)を指示対象とするが、その並び方は□と■によって与えられなくても構わない。別段、 $w$ と $b$ によって、あるいは陰と陽によって、あるいは1と0によって与えられても構わない。これは、異なる属性において同一の実体が指示されうることと同様の事態である。そのような<純粹>な並び方が延長様態の指示対象である。ならば、延長属性における実体と思惟属性における実体とが同一の実体である以上、思惟属性においても、ある延長様態が指示するのと同じの並び方を指示する思惟様態が必然的に存在するはずである。まさしくこのような意味で、延長様態  $a$  と思惟様態  $\alpha$  の指示対象は厳密に一致するのである。ところが他方、延長様態  $a$  によって指示対象が与えられる様式と、思惟様態  $\alpha$  によって指示対象が与えられる様式とは、前者が□と■によるものであり、後者が  $w$  と  $b$  によるものであるかぎり、全く異なると言わざるを得ない。すなわち延長様態  $a$  と思惟様態  $\alpha$  の意義は全く異なるのである。

そうすると、スピノザのコーパスにおいて、彼が様態の貫属性的同一性を肯定しているのは、その指示対象が主題となっている文脈であり、彼がその貫属性的同一性を否定しているのは、その意義が主題となっている文脈ではないか、という予想が自然に成り立つ。まさしくこれが私の解釈である。

属性とは、様態がどのような仕方で実体を表現するのか、すなわち□や■で表現するのか、 $w$  や  $b$  で表現するのか、1 や 0 で表現するのか、という観点から全様態を分類するところの分類装置である。この表現方式が如何なるものかという文脈に於いては、スピノザは様態の貫属性的同一性を否定するのである。

したがって、第3の疑問に対する私の回答は以下の通りである。様態とは、実体(=属性における因果的連結)を局所的に表現する表現者である。様態というこの表現者の指示対象が注目される限り、様態間の貫属性的な数的同一性はあり得る。他方、様態という表現者の意義が注目される限り、様態間の貫属性的な数的同一性はあり得ない。

## 第2章 エルトマン(およびシュヴェーグラー)とフィッシャーとの対立

### エルトマンの観念論的解釈

ヘーゲル学派に属するドイツ人哲学者エルトマン(Johann Eduard Erdmann: 1805–1992)は、『近世哲学史の学問的描写の試み』第2巻(Erdmann, 1834–1853: pp. 59–63)で、いわゆる観念論的解釈を次のように展開した。(段落記号 A・B・C…の使用は引用者が便宜的に



行ったものである。)

〔A 諸属性の実体に対する関係は、スピノザ説における最も難しく、また最も重要な論点である。

B 諸属性は外部から実体に来る (Die Attribute kommen von Aussen zur Substanz)。すでに [attributum という] 単語がこのことを示唆している。〔すなわち〕それは、実体にとって固有のもの (proprium や proprietas) ではなく、実体に (他のものによって) 帰属 (attribuere) されるものなのである。またスピノザはその定義において、諸属性が実体を構成する、とは述べず、諸属性は知性が実体において知覚するものである、と述べている [略]。〔略〕諸属性とは、ある外的な知性が実体——それ自体では全く規定を持たない実体——に持ち込むところの諸規定である。——実体はいかなる規定すなわち否定をも自らの内に許容し得ない。もし今何か規定されたものが実体について陳述されるとするならば、その場合、知性が実体に諸規定を持ち込むことによってのみそれは可能である。それゆえスピノザもまた、実体について語ったさいに、次のように言い添えることが出来た。すなわち、属性は実体と同じものであり、ただ、それが属性と呼ばれるのは、何らかの知性との関係においてであって、この知性が実体に或る特定の本性を帰属させる、と。したがって諸属性とは、なるほど実体の本質を表現する諸規定ではあるが、それらはしかし、それ [=実体の本質] を或る特定の仕方では表現し、実体そのものはいかなる存在様式をも持っていないから、諸属性は実体の外部 (ausserhalb der Substanz) に、或る考察する知性 (ein betrachtender Verstand) に、属しているのである。

C 実体の諸属性に対するこのような外的関係 (ausserliches Verhältniss) は、スピノザがいくつの属性を、またどのような属性を、実体に認めているかを考慮する場合にも判然とする。もし諸属性が実体そのものに内属するものであり実体にとって必然的なものであるならば、その場合、ある一定数の属性について、すなわち実体に固有なちょうど然々の数の属性について論じられることであろう。しかし、そのような必然性、すなわち被規定性は、実体のうちには存在せず、したがって、実体は、それにもたらされる属性の数に対しては全く無差別 (indifferent) なのである。また同様に、実体は、何らかの属性を自ら排除することも出来ない。なぜならそのようなこと [つまり属性の排除] はある一定の特異性 (Idiosyncrasie) を実体に帰属させることを意味するからである。したがって、実体は無限に多くの属性を持つ、すなわち、全ての可能な属性が実体の内に措定されうる、と言われるのである。このような無限に多くの属性にも係わらず、実体は単に2つの属性の下で、すなわち思惟属性と延長属性の下で考察される。よって、神すなわち実体は、知性が神を思惟属性の下で考察する限りは思惟するものであり、延長

属性の下で考察する限りは延長するものである。しかも、神がこれらの属性の下でのみ考察されるということの根拠は、神の内に存するのではなく、考察する人間精神（すなわちある存在する物体の観念）が延長と思惟のみを自らの内に見出す、ということに存する。それゆえ神は単にこれら2つの属性の下で考察される。〔略〕

D それゆえ、実際に諸属性は全く独立したものとして捉えられている、すなわち、諸属性は「それ自体で」把握されねばならない。諸属性はこの独立性 (*Selbständigkeit*) を、まずは相互間で持っているが、さらに、外的な知性が実体があるときは然々と、またあるときは然々と考察するがために、それ〔＝独立性〕を持たざるを得ないのである。しかし、属性の概念は実体の概念から独立してはいない。まさに、諸属性は〈或る本質〉を表現するものであるから、諸属性は、いかなる規定をも排除する実体の必然的な帰結ではあり得ない。規定性は実体にとっては無縁であり (*Die Bestimmtheit ist der Substanz fremd*)、したがってその一定の本質すなわち属性は実体に基づいて説明され得ず、むしろそれ自体で (*per se*) 把握されねばならないのである。

E しかし諸属性のこのような独立性によって、実体の単一性 (*Einheit der Substanz*) が危うくなるわけではない。むしろ、諸属性が自立的なものとして捉えられるということを通して初めて、実体の単一性は保持されうるのである。もしも諸属性が、その規定性において、実体の概念に依存しているならば、実体の中には、諸属性において自らを顕在化 (*expliciren*) する、すなわち自己規定をするという衝動 (*Trieb*) が、すなわち否定性 (*Negation*) が、仮定されねばならないであろうし、そうなると、実体はもはや自己同一的な実体ではないことになる。

F さて、これまで考察した事柄の結果を総括すると、次のようになる。唯一の実体が存在する。実体の外部にはいかなる実体も考えられ得ない。この実体はあるときは延長しておりまた思惟しているが、それは、実体が然々の属性の下で考察されるのに応じている。いかなる属性の下で考察されようとも、実体は等しく正しく認識され、実体自身にとっては、思惟しているものとして考えられるか延長しているものとして考えられるかということは重要ではない。「延長するもの」も「思惟するもの」も同一の事象であり、ただ考察のされ方が異なる。すなわち実体はいかに考察されるかということに対して無差別 (*indifferent*) である。〕

以上の議論のポイントを整理しておく。

エルトマンの観念論的解釈を支えている最大の論拠は、〈スピノザにとって実体そのものは絶対的に無規定なものである〉という一点に集約される。このことを彼は、段落 B では「実体はいかなる規定すなわち否定をも自らの内に許容し得ない」と表現し、段落 C では「被規



定性は、実体のうちには存在せず」、段落 D では「規定性は実体にとっては無縁であり」と表現する。エルトマンにとってスピノザの言う実体とは、あたかもパルメニデスにおける「有るもの」である。パルメニデスの「有るもの」とはいかなる具体的規定をも排した、生成消滅しない、ただ「有る」としか述定出来ないものであった。エルトマンは、スピノザの実体を全く同様に解釈するのである。

観念論的解釈を支えるその他の論拠も、少なくとも3つ挙げられている。

第1は、スピノザの「属性」定義の文言である。そこでは「知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもの」と述べられている。この「知性が……知覚するもの」という箇所を、エルトマンは、<属性は、実体そのものに内在せず、知性が実体を知覚するその様式に内在する>ことを意味すると解釈するのである。

第2は、スピノザの形而上学において、属性の数および種類が、あくまでも、実体を考察する知性に相対的であるとされていることである。もしも属性が実体の客観的な性質であるならばこのような事態は生じないであろう、とエルトマンは考えるのである。

第3は、観念論的解釈が、「実体の単一性 (Einheit der Substanz)」を理解する上で好都合であるということである。このことが段落 E で述べられている。そこでのエルトマンの極めて圧縮された議論を敷衍すると、次のようになろう。もし複数の属性 A と B とが実体の客観的な性質であるとする。このとき A はある実体の本質を構成し、B もある実体の本質を構成する。他方、スピノザが、異なる属性の間にはいかなる共通点も見出されえない（つまりそれらは通約不可能である）と考えていたことは明らかである。ならば、A を属性とする実体と B を属性とする実体が別個の実体であると考えerことはごく自然であろう（少なくとも、両者を同一の実体だと考える積極的な理由は何もない）。このようにして、實在論的解釈をとれば、単一であったはずの実体が、複数の属性を足場に分裂し、自己同一性を失うのではなからうか。

### シュヴェーグラーの観念論的解釈

エルトマン同様にヘーゲル学派に属するドイツ人哲学者シュヴェーグラー (Friedrich Karl Albert Schwegler: 1819–57) も、その著『哲学史概説』(Schwegler, 1847: pp. 244–245) で観念論的解釈を提示している。エルトマンの解釈と比べて何ら新味はないが、思想的興味のために、以下に引用しておく<sup>2)</sup>。

「属性と無限実体との関係はむずかしい問題である。[略] [思惟と延長という] 二つ

2) 岩波文庫訳 (シュヴェーグラー, 1847, pp. 35–7) を参照したが、引用者の判断で一部を訳し変えた。

の属性は、それ自体では無限である実体が、全てを思惟と延長とに分かつ知性の主観的認識に現れる規定であるよりほかない。そしてこれがスピノザの考えである。彼によれば属性とは、「知性が実体についてその本質を構成していると認めるもの」である。二つの属性はしたがって、実体の本質が、知覚する知性に対してのみ、このような一定の仕方で現れる規定である。実体そのものはこのような一定の存在の仕方に尽きるものではないから、それらはただ知性（これは実体の様態にすぎない）に対してのみ、実体の本質を表現するものとして現れるにすぎない。知性がこれら二つの属性の下でのみ実体を見るということは、実体そのものとは無関係である。実体そのものは無限に多くの属性を持っている、すなわち制限でない限りあらゆる可能な属性がそのうちに指定され得る。以上の2属性を実体に帰するのは人間の知性にすぎず、しかも、その人間の知性が理解しうる諸概念のうちこの2つのみが真に積極的であるから、言い換えれば実在性を持っているから、この2つだけを実体に帰するのである。したがって神すなわち実体は、知性がこれを思惟という属性のもとに考察するかぎり思惟であり、延長という属性のもとに考察する限り延長である。一口に言えば、これら2つの属性は経験的（empirisch）に採用された規定であって、実体の本質を尽くすものではない。実体はそれらの背後に絶対に無限なもの（das absolut Unendliche）として立っているのである。」

#### フィッシャーの实在論的解釈

ドイツ人哲学者クノー・フィッシャー（Kuno Fischer: 1824–1907）は、その著『近世哲学史』第1巻（Fischer, 1854: pp. 340–342）において、エルトマンの観念論的解釈を名指して非判し、自らの实在論的解釈を提示している。その議論を以下に引用する。（段落分けおよび段落記号 A・B・C……の使用は引用者が便宜的に行ったものである。）

「A [略] 属性とは何か、それは客観的な実在なのか、あるいは、主観的な概念なのか。昨今の人間の大半は後者の見地を完全に選択しており、とりわけエルトマンは、この解釈を擁護し、その全ての帰結を主張することに尽力している。

B 第一に引き合いに出されるのは、<あらゆる規定は否定である>という命題であり、また、スピノザ自身が実体を、述語を持たない本質として説明しているということである。今、属性がたとえ無限な述語であるとしてもあくまでも述語であるには違いないとするならば、またそれゆえ、実体そのものの本質は属性の内には把握され得ないとするならば、この〔属性という〕概念は単に我々の知性にのみ属し、事物の本質〔すなわち実体〕は属性に対して完全に無差別（gleichgültig）なものになろう。またスピノザ自身がこのことを属性の定義で説明している。というのも、曰く、属性とは<知性が実体に

ついて知覚するもの>であり、<知性の知覚>あるいは知性概念であるからである。そして、我々がこれらの解釈者に反対して、スピノザは<その本質を構成するものとして>と付け加えているのではないかと述べようものなら、それらの解釈者たちは、まさにこの<として>を引き合いに出し、最終的には、自分の主張を正当化するために、文法的な多義性を利用することであろう。すなわち、このような分詞構文は対象（すなわち属性）に関係付けられることも可能であり、また、知性に関係付けられることも可能であり、確かに、属性の定義を二重の仕方でも翻訳することには何の文法的な妨げも無いのである。C しかしながら、スピノザは何を属性の下に理解し得たのだろうか。というのも、彼は、論理的な多義性を秘匿するために文法的な多義性を利用するような哲学者ではないのだから。彼にとっては、属性とは、実体の本質として知性によって把握される一つの〔客観的な〕規定を意味するものなのか、それとも、知性自身が言わば実体の本質を構成するということによって、知性が実体について把握するところの〔主観的な〕規定なのであるか。我々は問わねばならぬ、我々が事物をスピノザ流に考察するとき、どの時点から、知性は、事物の本質すなわち実体を構成することが出来るのであろうか。

D 我々が方法を体系に前置きして論じ、次のことを示したのは訳がある。すなわち、実体は、数学的論証の形式に於いてのみ認識され得るのであり、また、自明の如く、そのような形式においては、如何なるものも勝手に拵え上げられはせず、むしろ万物は考察されるや認識されるのである。真理が存在し、我々はその真理を洞察し、その真理のうちの何を変更することも出来ないし、自分の知性に基づいて〔恣意的に〕何を確認することも出来ない。なぜなら、この場合我々は、一定の必然性という全き強制の下で思惟するからである。空間の概念から、それが永遠であるということが帰結する場合、この〔永遠という〕属性は数学的知性の産物ではなく、その〔概念の〕対象の内在的かつ本質的な特質である。これと同様に、我々は、実体ないし世界秩序に構造を付与しようというようなことは諦めねばならない。実体が与えられるや、実体はその構造を自分自身に付与するのであり、実体は、その本質がその内に確認されるところの諸属性を、我々の知性からはじめて受け取るわけではないのである。

E それゆえ我々は、属性が単に我々に於けるシエマに過ぎない、あるいは、我々が実体に授与するところの、そして、それ自体としては客観的な意味を持たないような、単なる知性概念である、というような説明を拒絶するのである。もしもスピノザ自身がこれらの解釈者たちと同意見であるならば、彼は事物の本質を知性からはっきりと区別し、知性の認識——あるいは、実体に添付される諸属性——を、主観的な認識形式として説明したであろうし、そうすると、彼の言う実体とは物自体（Ding an sich）であって彼の言う諸属性とは人間的能力（menschliche Vermoegen）となっていたであろうし、換言

すれば、スピノザはスピノザではなくむしろカントであったろうし、彼の形而上学は存在論——すなわち事物の本質についての教説——ではなく、純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*) あるいは知識学 (*Wissenschaftslehre*) となっていたであろう。それゆえ、属性は知性に内属するのみであり、実体の客観的本質を全く含んでいない、というような見解は、スピノザに関する限り、100年も早すぎる〔時代錯誤的な〕言説である、ということになる。〕

以上に引用したフィッシャーの議論を整理する。

フィッシャーは、段落 A と B でエルトマンの観念論的解釈の要点を提示している。興味深いのは、エルトマンが、「属性」定義の文言である “*id, quod intellectus de substantia percipit, tanquam ejusdem essentiam constituens*” の中の “*constituens*” という現在分詞を、主格と見なし、形容詞節内の主語の *intellectus* に係るものとして読んでいる、というフィッシャーの指摘である。実際には、この現在分詞を主格と読もうとも目的格と読もうとも観念論的解釈は可能であるし、また、エルトマン自身がそれを主格と読んでいたかどうかも判然としない。しかしながら、この現在分詞を主格と見なす読み方は、＜認識が対象に従うのではなく対象が認識に従う＞というカント認識論を想起させるに余り有るものであり、ゆえに、フィッシャーのこのような指摘は、エルトマン解釈が時代錯誤的なくスピノザのカント化＞に他ならない、という印象を鮮烈にするためには戦略的に実に効果的である。

段落 C でフィッシャーは問う、知性自身が実体の本質を構成するというようなことが可能であろうか、と。段落 D でフィッシャーは、スピノザが自らの形而上学に数学的論証形式を用いていることの意味を確認する。数学的論証とは、対象に関する真理を発見する手続きであり、対象に対して虚構を押し付けることではない。すなわち、数学的論証とは、対象がすでに持っている特質を認識主体が、対象そのものが発揮するある種の強制力の下で認識するというプロセスであり、対象に対して認識主体が虚構を恣意的に授与することではないのである。フィッシャーは、まさにこのような方法論をスピノザが用いていることは、まさに、スピノザにとっての知性が、真理（すなわち対象そのものに内在する性質）を発見する役割を担わされていることを示すと考えるのである。それゆえ、属性が、「知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもの」であるならば、まさに属性は実体の本質を構成するものなのであって、「それ自体としては客観的意味を持たないような、単なる知性概念」では決してない。観念論的解釈は間違っている。そして段落 E では、観念論的解釈を採るということは＜スピノザのカント化あるいはフィヒテ化＞に他ならない、と宣されるのである。

### 第3章 ウルフソンとゲルーの対立

#### ウルフソンの観念論的解釈

ユダヤ及びイスラムを含む中世思想の碩学ウルフソン (Harry Austryn Wolfson: 1887–1974) は、その大著『スピノザの哲学——彼の推論の潜在的な諸過程を解明する』第1巻 (Wolfson, 1934) の第5章・第4節「実体に対する属性の関係 (Relation of Attribute to Substance)」において観念論的解釈を提示している。彼の典拠は、『エチカ』の内在的議論のみならず、スピノザに影響を与えたであろう中世思想にまで及んでいる。彼の議論の概要を以下に再現する。

「スピノザの神ないし実体は、中世合理主義者たちの神と同様に、その本質については不可知 (unknowable in His essence) である」。中世ユダヤ思想家マイモニデスの著書『迷える者の導き』からウルフソンは、次の箇所を引用する。「神の本質についての知識を獲得する可能性は無い。……神について人間が認識し得る唯一の事柄は、神が存在するという事実である」。まさにこの伝統の下で、ウルフソンはスピノザの「属性」概念を解釈し、次のように述べる。「スピノザは『属性』という伝統的な術語を採用し、それを、それ自体においては不可知な実体が人間精神に顕現する仕方 (the manner in which substance, unknowable in itself, manifests itself to the human mind) の記述として活用する。」

もっとも、ウルフソンも、エルトマンとフィッシャーによって体现された解釈上の対立について知らないわけではない。すなわち彼も、<諸属性は、知性の中でのみ存する、実体についての主観的な思惟様式に過ぎない>という解釈 (彼が言うところの「主観的解釈」と、<諸属性は、知性の外に存する、実体の本質を構成する諸要素である>という解釈 (「客観的解釈」と) の対立を意識している。彼は言う。「前者の解釈に立てば、[属性が] 知性によって知覚されるというのは知性によって『作出 (invent)』されるという謂いであり、……。後者の解釈に立てば、[属性が] 知性によって知覚されるというのは知性によってただ『発見 (discover)』されるという謂いである」。しかもウルフソンは、同様の対立は中世ユダヤ哲学においても存在したということ指摘した上で、スピノザは (そのような歴史的経緯を意識しつつ) 自らの哲学的体系の内在的要求に従って属性を主観的なものと見なしたと主張する。彼の議論は次のようなものである。

中世ユダヤ思想において、神が「本質的諸属性 (essential attributes)」を持つか持たないかが大きな問題となっていた。なぜなら、本質的諸属性が客観的なものであるかぎり、神がそれらを持つことは、神の「絶対的単純性 (absolute simplicity)」を損なうことになり得るからである。二つの陣営が対立した。第1はマイモニデス (Maimonides; 1135/38–1204) に



代表され、本質的諸属性の客観性を肯定しつつも、神の絶対的単純性を維持するため、神が本質的諸属性を持つことを否定する陣営である。第2はゲルソニデス（Gersonides; 1288–1344）に代表され、神が本質的諸属性を持つことを肯定しつつも、神の絶対的単純性を維持するため、本質的諸属性の客観性を否定する陣営である（イスラム哲学者の中では、アヴェロエスすなわちイブン・ルシュド（Averroes/Ibn Rochd; 1126–98）がこの陣営に属する）。そしてウルフソンは、スピノザがこのゲルソニデスの系統に属すると考える。この点においてスピノザはマイモニデスの批判者だというのである。

ではなぜスピノザはゲルソニデスの系統に与する必要があったのか。スピノザは諸属性が相互に独立していることを判然と認めている。と同時に、神（実体）がいかなる部分をも持たない単純な存在であることをも主張している。すなわちスピノザにとって神（実体）は、相互に独立した諸属性をもちながらも緊密な単純性を維持する存在であった。しかしながら、＜属性の複数性＞と＜実体の単純性＞とは矛盾しないだろうか。まさにこの矛盾の可能性を封じ込めるためにスピノザはゲルソニデスの立場を踏襲したとウルフソンは見るのである。この立場によると、諸属性は同一の対象を捉えるさいの認識者の複数の見方に過ぎず、その相違は、いわば同一物を指示する複数の名前の相違程度のものである。「諸属性は、同一の実体の実在性および有を表現する異なった言葉に過ぎない」のである。それゆえに実体の単純性は、それが複数の属性を持つことによって何ら損なわれることはない。ということは、諸属性によって神をいくら形容しようとも、それらの属性は神が客観的にいかなるものであるかを決して示してはくれない。それゆえに、すでに引用したように、「スピノザの神ないし実体は、中世合理主義者たちの神と同様に、その本質については不可知である」ということになるわけである。

### ゲルーによる実在論的解釈

20世紀後半フランスにおける代表的なスピノザ研究者マルシアル・ゲルーは、その大著『スピノザ』第1巻の第3付録「属性を巡る論争」（La controverse sur l'attribut; Gueroult, 1968, pp. 428–61）において、実在論的解釈を提示するとともに、ウルフソンの観念論的解釈を徹底的に批判する。まずは彼の実在論的解釈を見てみる。彼は様々な論拠を挙げている（自説の論拠を徹底的に枚挙するというのがゲルーという解釈者に特徴的なスタイルなのである）が、それを逐一紹介するのは実に煩瑣なので、ここではそれらを大きく2点に要約することにする。

第1の論拠は、観念論的解釈者が従来典拠としてきたテキストを再吟味すれば、それらはむしろ実在論的解釈を促すことに気付かれる、という論拠である。例えば、観念論的解釈者は、スピノザが様々な箇所で＜属性は実体の本質を構成（constituere）する＞とは書かずに



＜属性は実体の本質を表現 (exprimere) する＞と書いていることを強調するが、＜スピノザの語法＞を吟味すれば、A が B を表現するということは、A が B に属する、すなわち、A が B を構成するということを含意しており、観念論的解釈者が取り上げる箇所はむしろ実在論的解釈に有利なのである。そのようなスピノザの語法＞は、第1部定理19証明における「神の属性とは神の実体の本質を表現するもの (定義4より)、言い換えれば実体に属するもの、と解されるべきである」という文言によって確認される。また、観念論的解釈者(ゲルーはエルトマンの名前を挙げています)は、第1部定理4証明に「知性の外には、実体およびその変状のほか何もものも存在しない」という箇所を取り上げ、このことが＜属性は知性の内に存在する＞ことを含意すると主張する。ところが、実は同証明の末尾には、「知性の外には、実体、あるいは同じことだが (定義4により) その属性、およびその変状のほかは、何もない」と書かれており、これはむしろ＜属性は知性の外に存在する＞ことを含意しているのである。

第2の論拠は、スピノザ哲学における知性の評価に係わる。観念論的解釈者は、属性と実体との関係を現象と物自体との関係と類比的に捉えるからといって、スピノザを時代錯誤的に＜カント化＞しているわけではないと自己弁護する。なぜなら、彼らの言い分によると、＜それ自体で (in re)＞と＜知性の内で (in intellectu)＞との対比というのは、カント以前の古代哲学者および近代哲学者においても一般に見られるからである。ゲルーはこの「言い分」の中身そのものは認める。しかしそれでもゲルーは、観念論的解釈が時代錯誤的であるという点については譲らない。カントの認識論は、＜それ自体で＞と＜知性の内で＞との陳腐な対比関係に尽きるのではなく、知性を、対象を「現象化 (phenomenaliser) する形式 (forme)」と見なし、その見地から、知性が実体について捉える属性が単に現象に過ぎない、と結論する点に存するのである。そして、まさにこのような＜知性観＞を、「＜考えられねばならぬ cogitari debet＞を＜である est＞と等置」するスピノザの哲学の内に読み込むという点で、観念論的解釈はまさに時代錯誤的なのである。ゲルーは言う。「誤読 (contresens) の根は、古典的な合理論者における知性 (entendement des rationalistes classiques) の代わりにカント的な知性 (entendement kantien) を持ってきたという点にある。合理論者における知性は、形式ではなく、ましてや現物を歪める形式でもなく、真に、すなわち在るがままに (ラテン語では ut in se sunt に) 認識する能力なのである」。以上のような第2の論拠を整理するとこうなる。スピノザ哲学における知性とは、観念論的解釈者の想定とは異なり、事物を在るがままに認識する能力である。それゆえ、「属性」定義における、「知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもの」という文言は観念論的解釈ではなく実在論的解釈を支持しているのである。

### ゲルーによるウルフソン批判

以上見たように、一般的な形で、観念論的解釈を論駁しかつ實在論的解釈を主張した上で、ゲルーは、激烈なウルフソン批判を展開する。その批判はいくつもの論点に係わっている。ここでは注目すべき2つの論点を紹介するに留めたい。

第1の論点は、普遍 (*universaux*) と属性との関係に係わる。ウルフソンは、スピノザがクレスカスやゲルソニデス、あるいはホップズと同様に、唯名論、すなわち類や種といった普遍は名前に過ぎないという立場を採っていたと見る。これについてはゲルーも同意する。しかしながら、ウルフソンは更に、このことを前提としつつ、スピノザが属性をも普遍の一種であると見なしていたと考えることで、属性に関する観念論的解釈に立つ。他方ゲルーは、この〈スピノザが属性をも普遍の一種であると見なしていた〉という解釈を拒絶するのである。なぜなら、例えば『短論文』において、属性は類ではなく、むしろ「事物、あるいは〔中略〕、それ自体で存在し、それゆえ自らを認識せしめ、自分自身を自分自身によって顕現する有」であると言われているからである。スピノザにとって普遍は實在に基礎を持たぬ言わば無であるが、他方、属性は「全ての有の中でも最も完全かつ最も實在的なもの」なのである。それゆえ、属性を普遍の一種と見なすウルフソンの解釈をゲルーは完全に否定する。

第2の論点は、神の単純性 (= 実体の単一性) をいかに担保するか、という問題に係わる。ウルフソンは、神の単純性は、属性が (主観が実体に付与する) 単なる名前に過ぎないという観念論的な立場によって苦も無く担保され得ると考えた。他方、ゲルーは、スピノザにとって神の単純性 (実体の単一性) はそのような仕方で担保されているのではないと言う。しかし實在論的解釈の問題は、まさに実体の単一性が危うくなるという点にあったのではないか。この苦境をゲルーはどのように克服するのか。ここで彼は、実体の単一性に関する彼独特の議論を提示する。それは次のようなものである。

實在的な諸属性の各々が別個の実体を構成せず、単一の実体を構成するのは、各々の属性が「同時 (*simul*)」に、かつ「同一の仕方および同一の必然性 (*eodem modo et eadem necessitate*)」でもって自己および諸様態を産出するからである、とゲルーは主張する。すなわちゲルーは、〈相互に独立した諸属性は、それぞれが同時的かつ同型的な因果作用を持つ場合には、個々別々の実体ではなく、同一の実体を構成する〉という原理を持ち出すことによって、神 (実体) の単純性を確保できると言うのである。このような見地に立てば、「異質 (*hétérogène*) な諸属性が結合して唯一かつ不可分の存在を成すことは、諸属性を名前に化してしまう必要性など無く、完全に理解可能である」、とゲルーは主張するのである。

以上に見たゲルーの議論は、神の絶対的単純性を放棄しているという点で非常に大胆である。すなわち、ゲルーは、〈絶対的に単純な神が、根本的に異質な複数の要素 (= 諸属性) から構成されている〉という説をスピノザの内に認めることの論理的困難を認める。そして、

この論理的困難を無理に克服しようとするのが、観念論的解釈という誤謬を生み出したと診断する。そして自らは、<神が根本的に異質な複数の要素（＝諸属性）から構成されている>ことを優先し、神の<絶対的単純性>を放棄するのである。要するに、ゲルーにとって、スピノザにとっての神の統一性（*unité*）とは、デカルトにとっての人間の統一性が、実在的に区別される思惟実体（精神）と延長実体（身体）との「合成（*composition*）」によって与えられていたのと類比的に、実在的に区別される複数の属性（ないし実体）の合成によって与えられている。神の統一性は「本性の統一性（*unité de nature*）」ではなく「合成の統一性（*unité de composition*）」なのである<sup>3)</sup>。

#### ゲルーによるフィッシャー批判

なお、ゲルーは以上のように観念論的解釈を粉砕するだけでなく、フィッシャーの実在論的解釈の難点にも言及している（*Gueroult, 1968, p. 460*）。ゲルーの見るところフィッシャーは、神は無規定的であり他方（実在的な）属性は規定的であるから両者の間には超えがたい溝があると考えている。そこでフィッシャーは属性を、実体が因果的に作用するさいの「原初的力（*Urkraft*）」であると解釈し、実体そのものは属性の背後に無規定的なものとして潜むという解釈を採る。ゲルーに言わせると、これでは実体の理解可能性（可知性）というスピノザの基本的立場に抵触し、結局は観念論的解釈と同じ過ちに陥っている。ゲルーにとっては、スピノザの神が無規定的であるというのは全くの誤解である。スピノザの神は、思惟属性や延長属性といった具体的な規定からの構成物なのである。

### 第4章 論争の2陣営に対する部分勝訴・部分敗訴

#### 観念論的解釈の長所と短所

観念論的解釈の根幹を支えているのは、<スピノザの言う実体とは無規定なものである>という直観である。言い換えれば、スピノザの言う実体とは、延長や思惟といった具体的規定の背後に、それら具体的規定を抽象したものとして存在する、という直観である。

また、観念論的解釈を側面から支えているのは、この解釈に従う限り、実体の単一性が簡単に理解できるということである。すなわち、この解釈に従う限り、延長や思惟といった属性は単に知性が神という実体を知覚するさいの認識形式に過ぎないのであるから、神という実体の単一性と属性の複数性との両立はごく自然に理解され得る、ということである。

私は、以上2段落に述べたことは、今日でも、観念論的解釈の強みとして認めてよいと考

3) スピノザに於ける神の統一性については、ゲルーは *Geroult (1968)* の本文第7章全体でも詳述しており、この段落はその箇所に依拠している。

える。なぜか。ここで私は、本論第1章で提示した、スピノザの「属性」についての私自身の解釈を基に観念論的解釈を弁護する。

スピノザがある属性における実体と捉えていたものは、その属性における因果的連結のことであった。セル・オートマトンのモデルを用いれば、実体とはセル・オートマトンの絵模様に対応する。ここで「絵模様」と言うのは、□や■、w と b、といった図柄の種類を抽象した——その意味で〈純粹〉な——セルの並び方のことであった。またスピノザは、任意の2属性 A と B について、それぞれの因果的結合は必然的に同型である、と考えた。これは言い換えれば、セル・オートマトンの絵模様が、属性に関わらず常に同じになるということである。そしてこのことこそが、スピノザ形而上学の根本テーゼとしての唯一実体説（神のみが実体であるという説）の意味するところであった。スピノザにとって実体の唯一性とは属性の秩序の唯一性に他ならないのである。さて、そうすると、実体は、セル・オートマトンが□と■によって構成されているか、あるいは w と b によって構成されているか、といった規定性に束縛されてはいない。つまり実体の同一性は、属性の相違によって影響を受けない。この意味で、まさに観念論的解釈者の言う通り、〈実体とは、延長や思惟といった具体的規定の背後に、それら具体的規定を抽象したものとして存在する〉のである。この意味で、確かに実体は無規定的なのである。

また、属性という具体的規定を抽象したものが実体なのだから、属性の複数性と実体の単一性とが両立するという観念論的解釈者の指摘も、その通りである。同一の実体（絵模様）を具体的に描く際、□と■を用いるか、w と b を用いるか、ということはまったく付随的で二次的な事柄に過ぎない。喩えれば、これらは衣服に相当する。衣服の複数性が人物の単一性と矛盾しないのと同様に、属性の複数性と実体の単一性は矛盾しないのである。

しかしながら、以下の諸点で観念論的解釈者は完全に誤っている。第1に、観念論的解釈者はスピノザの言う実体を、あらゆる意味に於いて無規定的なもの、つまりパルメニデスの「有るもの」に類比的なものを見なした。この解釈は誤りである。なぜなら、各属性に於ける因果的連結の具体的在り様によって実体はまさに具体的に規定されているからである。別様に言えば、任意の様態は、実体を局所的かつ具体的に規定しているのである。彼らは実体の無規定性を過剰に受け取りすぎたのである。第2に、観念論的解釈者は、各属性を、「知性の外」には存在しない、単に主観的なものと捉えた。これも誤りである。（観念論的解釈者も認める通り）任意の様態は「知性の外」に客観的に存在するものであり、ならば、様態の集合たる属性も、当然、「知性の外」に客観的に存在するのである。比喻を使うなら、確かに一つの属性は実体にとっての一つの衣服に過ぎないものではあるが、しかしそれでも衣服自体は一つの客観的存在なのである。彼らは属性の副次性を過剰に受け取りすぎたのである。

### 実在論的解釈の長所と短所

実在論的解釈者は、スピノザを時代錯誤的にカント化してはならない、と考える。すなわち、スピノザにおける知性とは対象それ自体の在り方を見出す能力であり、決して、カントのように、(物自体とは区別される)現象として対象を構成する能力ではない、という点を彼らは強調する。フィッシャーの議論も、ゲルーの議論も、このようなスピノザの知性の位置付けをその要諦としているのである。

この点に関してはフィッシャーとゲルーは正しい。フィッシャーの言うごとく、数学的方法論を採るスピノザにとって、観念の明晰判明性とは、認識の客観性の保証に他ならない。だからこそスピノザは、『エチカ』第1部公理6で、「真の観念〔＝明晰判明な観念〕はその対象と一致しなければならない」と宣言しているのである。スピノザは、まさにデカルトやマルブランシュ、ライプニッツと同様に、(否、彼ら以上に)合理主義者(理性主義者)なのである。真理探究能力としての理性に対する彼の信頼感を証左するテキストはスピノザのコーパスの多くの場所で見出されうる。「知性すなわち真理 (*intellectus sive verum*)」などという『知性改善論』中の表現はその端的な一例に過ぎない。『エチカ』第2部後半の多くの議論もまさにこの論点に密接に関わっているのである。

したがって、「知性が実体についてその本質を構成していると知覚する」ところの、延長や思惟などの属性が、まさに実体の本質を客観的に構成していることは疑いようがない。この点については実在論的解釈が正しい。しかしながら、問題は、その後に残る。

延長や思惟といった属性は客観的存在である。では、どのような客観的存在なのか。この間に対してゲルーは、属性は「事物 (*chose*)」という客観的存在である、と考えてしまった。そしていったん属性を事物として捉えたと、その後には、＜属性の実体化＞という迷路が待ち受けているのである。というのも、属性という事物が実体の本質を構成しているのであれば、属性それ自体が一個の実体であると言ってもおかしいとは思われない。事実、スピノザのコーパスには、属性を実体と同様に扱っている箇所がいくつもある。「実体、あるいは同じことだがその属性」(第1部定理4証明)はその一例に過ぎない。そこで事実ゲルーは、属性を実体と判然と同一視する。

ゲルーは言う。「属性とは、固有の本性を構成するものにおいて顕現した、実物としての実体以外の如何なるものでもない」。「属性と実体とは交換可能である」。「実体と属性との間には観念的区別以外のものはない」。「属性とは実体のことである」。「実体と、知性によって実体と同一視されるもの即ち属性との間では、差異はゼロである (*la difference est nulle*)」。

しかし、このようなく属性の実体化は、ゲルーを袋小路に追い込むだけなのである。この点については節を改めて論じる。



### ＜属性の実体化＞が至る袋小路

＜属性＝実体＞という等式を認めてしまうと、等号の左辺に来るものと右辺に来るものの数がなぜ一致しないのか、という袋小路にぶつかってしまう。すなわち、属性は、延長属性や思惟属性など、異なるものが無限個存在するとされるのにも係わらず、他方、実体は唯一つしか存在しないとされるのは、どういうわけなのかという難問に遭遇するのである。

ゲルーは、複数属性説と唯一実体説との調停という難問を解くために、次のような実に苦しい原理を持ち出さざるを得なかった。彼は言う。「神は自らの内にすべての実体を吸収 (absorber) し、その結果、神の外部に何らかの実体が存在するという可能性が排除される」(Gueroult, 1968, p. 222)。「神は唯一実体であるが、他方、神は、無限知性によって把握され得る無限個の諸実体、すなわち、それ自体無限であり、それ自体によって必然的に存在し、自然界に属する諸実体、によって構成されている」(op. cit., p. 224)。すなわち、神という複合実体は他の全ての単純実体を「吸収」し、他方、複数の単純実体は神という唯一の複合実体を「構成」するというのである。少なくとも私は、このような＜吸収／構成＞説が書かれている箇所を『エチカ』の中に見出すことはできない。このような苦しい解釈が出てくるのも、そもそもゲルーが属性を「事物 (chose)」と見なすからである。

属性は「事物 (chose)」ではない。それは、様態の「集合 (ensemble)」である。その集合の中の秩序ないし因果的連結が実体である。複数の異なる属性が同型である場合、すなわち、同じ因果的接続を示す場合、当然、それらの属性は唯一の実体を表現していることになる。この見地に立てば、複数属性説と唯一実体説とは何ら矛盾しない。ゲルーの苦肉の策、すなわち＜吸収／構成＞説などを持ち出す必要は全く無いのである。

### 引用・参考文献

- Erdmann, Johann Eduard (1834–1853): *Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neuern Philosophie*, Zweiter Band (Fr. Frommanns Verlag, 1933).
- Fischer, Kuno (1854): *Geschichte der neuern Philosophie*, Erster Band (Verlag von Bassermann).
- Gueroult, Martial (1968): *Spinoza, I-Dieu* (Aubier-Montagne).
- Schwegler, Friedrich Karl Albert (1847): *Geschichte der Philosophie im Umriss* (Reclam).
- Wolfson, Harry Austryn (1934): *The Philosophy of Spinoza* (Harvard UP).
- シュヴェーグラー (1847): (谷川徹三・松村一人訳)『西洋哲学史』(下巻)(岩波書店, 1958年)。
- 松田克進 (2005): 「スピノザ形而上学理解のための方法論」, 広島修道大学人間環境学会編『人間環境学研究』第3巻・第2号(通巻第5号)所収。